

平成30年度使用小学校用教科用図書

「特別の教科 道徳」

採択協議会議事録（概要）

北諸県採択地区協議会

平成29年度 教科用図書北諸県採択協議会 議事録（概要）

【小学校 特別の教科 道徳】

質疑（回答者：専門委員長）

Q 道徳の授業を展開する中で、地域の実態、よさや課題は、どういったものがあるのか。

A 本地区の児童のよさは、誠実素直な子どもが多いこと、明るく元気であり、男女の仲がよいこと、困っている人や下級生にやさしく接することができることである。

課題としては、善悪の判断に迷いが生じたり、きまりが守れなかったりすること。人との関わりについて、自己中心的な時が見受けられること。真面目にボランティアするが積極性が物足りないことである。

Q 道徳の教科書で、指導内容としては、どの教科書も網羅しているのか。

A 内容項目については、どの発行者においても全て網羅されている。題材数が34時間分から40時間分と差があるが、どの教科書も何かが不足しているということはない。

Q 別冊がついているものと、ついていないものとあるが、その取扱いはどうか。

A 学図、日文、廣あかつきが2分冊となっている。他の会社は、ワークシートが活用できるようにCDがついている。8者とも「書く」活動については、何らかの手立てを打っている。

Q 各学校の指導計画を踏まえた上での配慮があるのか。

A 教出を除いて、各会社2年生から6年生、35時間以上題材が配置してある。各学校の重点目標を踏まえ、どの教科書を使っても指導計画を立てて実施できる。教出の足りない1時間は補充教材やこれまでの副教材などを実施することになる。

Q 子どもたちはまず「目次」を見る。「目次」の工夫についてはどうか。

A 目次については発行者によって様々であるが、教科書の初めに、各者、道徳の時間にどんなことを考え、どのように活動するのか解説しているページがある。

協議（主な意見）

- 子どもたちは、まず目次を見る。目次を見比べたときに、日文が一番優れている。
- 別冊が付いているか、付いていないかという点も大きい。別冊に書くことに時間がかかってしまうのではないか。ディスカッションさせて価値を深めたいところもある。指導する立場からすると、別冊はない方がよいのではないか。
- 本地区の実態を考えると、別冊があると「こんなにいっぱい書かないといけないのか」と、率直な意見として出るのではないか。道徳の時間は楽しいと思わせなければならない。
- 先生方の思いや学級の子どもたちの実態に応じた授業の進め方もあるので、授業の流し方があまりにも決められるようなものだと、先生方も子どもたちも窮屈になってしまうのではないか。
- 一般的な授業時数は年間35時間であるので、補充教材もあるが、題材はやはり35題材以上あった方がよい。
- 道徳は、これから教科の教科書として、出典や責任の所在がきちんとされている方がよい。その点で、編修のやり方からすると光村と光文がよい。
- 光文は読み物の文章の下段に、児童に考えさせるための内容が吹き出しで示されており、指導しやすい。ただ、子どもの考えがそれに引っ張られることがある。
- 光村のコラムの部分は、子どもに考えさせる、議論させることにつながり、生活場面につなげていくという教科書のつくりが洗練されている。
- 東書は、教科書の初めに道徳の学習の進め方がシンプルに示されている。毎回の道徳は、この示された4つのことが一番大切。この見開きは6年生まで共通したものになっている。
- 利便性として、教科書の重さや大きさ、文字の大きさなど、光村がよい。表紙もシンプルで魅力的である。

賛成多数で「光村」を選定